



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	楚ト笹祭禱簡における宗教儀礼と鬼神信仰に関する研究
Author(s)	趙, 珊
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16970号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16970
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99814
Type	doctoral thesis
File Information	Shan_Zhao_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：趙 珊

学位論文題名

楚卜筮祭禱簡における宗教儀礼と鬼神信仰に関する研究

本論文の総合題目は「楚卜筮祭禱簡における宗教儀礼と鬼神信仰に関する研究」である。その中心的な目的は、戦国期楚国において展開した卜筮・祭禱実践を、出土竹簡・伝世文献・考古資料を総合的に用いて分析し、楚人が想定した鬼神世界の構造と、そこにおける宗教儀礼の運用実態を明らかにする点にある。具体的には、まず、卜筮祭禱簡を「随葬文書」として改めてその性格と機能および楚人の死生観・祖先観の中での位置づけを明確にする。次に、包山卜筮祭禱簡に特徴的に見られる「凶攻解」および「攻尹之攻執事人」の性格を再検討し、楚地における特殊な祭禱儀礼の一類型を明らかにする。さらに、包山・望山・天星観・秦家嘴・新蔡葛陵など各墓葬における卜筮祭禱簡を横断的に比較し、命辞構造・祭禱対象・凶攻解対象などに見られる異同を通じて、楚人の鬼神信仰と宗教儀礼の多様性と共通性を明らかにする。また、卜筮祭禱簡に現れる祖先神・自然神・土地神・厲鬼などの諸範疇を再整理し、それぞれの実体を再検討する。最後に、卜筮祭禱簡に見られる祭禱方式を、伝世本および竹簡本『金縢』に描かれた儀礼実践と対照し、両者の比較検討から、従来十分に説明されてこなかった歴史的問題に対して新たな解釈可能性を提示する。

以上の研究目的と方法に基づき、本論文は、序章と六つの章、そして付録から構成される。

序章では、本研究の対象となる卜筮祭禱簡をめぐる研究背景を整理し、戦国期楚国における宗教実践と鬼神信仰に関して本論文が解決を試みる課題と研究目的を明確にする。あわせて、使用する主な文献資料と分析の手順を示し、本論文全体を貫く基本的な研究方法を提示する。

第一章では、包山・望山・天星観等に出土する卜筮祭禱簡を、埋葬時に墓室へ納められた随葬文書として捉え直し、その性格を検討した。その結果、卜筮祭禱簡が随葬されたことは偶然ではなく、先秦期における楚人の生死観・鬼神観・祖先祭祀制度が葬送実践の中で具体化した結果であることを示した。そこに記されるのは抽象的概念ではなく、墓主が疾病・凶禍・運命の不確実性に直面して実際に行った占筮と祭祀の記録であり、個人の祈願と畏怖、そして楚人が鬼神秩序を理解し人鬼関係を維持しようとした具体的方途を映し出すものである。

この性格に照らせば、卜筮祭禱簡の随葬は、墓主が死後の世界へ赴くに先立ち鬼神へ提出する「信仰履歴」・「供養証明」と位置づけられる。すなわち、生前に祭祀義務を怠らなかったことを証し、死後も祖先・諸神の庇護を得て無依の鬼となることを免れようとする宗教的行為である。また、竹簡には疾病の推移や祭祀方案、占断結果など、宗族内部にとどまるべき私的情報が詳細に記録されており、その随葬はこれらの記録を外部に漏らさず保全・封印すると同時に、墓主の魂が鬼神世界へ入るための準入文書としても機能していたと考えられる。さらに、死を生を終止ではなく、生者の世界から鬼神の世界への転化とみなす発想や、死後も祖先の庇護と神霊の承認を必要とするという観念は、後世の「買地券」と通底する論理を備える。よって、卜筮祭禱簡は、生前の卜筮・祭禱行為の記録であると同時に、楚人の鬼神信仰・宗教儀礼・死生観を究明するための核心的史料であると言える。

第二章では、包山卜筮祭禱簡における「凶攻解」を再検討の対象とした。従来、多くの研究者は、『周礼』に見える「六祈」の一つとして「攻」を捉え、「凶攻解」を鬼神に対する強硬な除祟手段と理解してきた。しかし、『楚地出土戦国簡冊（十四種）』において既に指摘されるように、「攻」は「攻執事人」と密接に関連する可能性が高い。本章ではこうした指摘を踏まえつつ、「凶攻解」の語彙および用例の分析を行い、その語を「凶攻解」を「攻をして解せしむ」と読みうることを、すなわち「攻」（巫祝と類似する職能者）が鬼神との交渉を通じて占筮依頼者の憂患を他所へ転移させる一種の移

崇法であり、しかもそれが予備案として位置づけられていることを導き出した。

この解釈は、楚地の祭祀儀礼における災厄対処が除崇案だけではなく、祟りを根本的には除去しえないものと捉えつつ、まず祖先神らの加護を祈願し、それでも不足と占断される場合に「凶攻解」によって祟りの転移を図るという、多段的かつ柔軟な方策を備えていたことを示すものである。また、「凶攻解」案が占筮依頼者の病状や具体的状況に応じて予備案として組み込まれる点は、楚地の祭禱が固定的な儀礼ではなく、現実の問題解決に即応的に調整される実践であったことを明らかにする。こうした理解は、従来の除崇法中心の枠組みを修正し、楚地祭祀における儀礼運用と鬼神観の再評価を促すものである。なお、「攻」の具体的行為や祝詞の有無、移崇対象の性格などは依然として不明な点が多く、他地域資料や伝世文献との比較による一層の検証が今後の課題として残されている。

第三章では、天星観ト筮祭禱簡における鬼神信仰を、祭祀対象の再分類と事例分析を通じて検討した。その結果、天星観簡に見える祭祀対象は、祖先・神・厲鬼の三類に区分するのが妥当であり、とりわけ祖先神「恵公」と自然神「大水」が、多様な祭法と高格の犠牲をもって集中的に祀られる守護的存在として位置づけられることが明らかとなった。また、神祇は土地神・自然神・その他の神祇に整理しうるが、「その他」に属する神々の性格の確定が困難なものも多く、楚人の鬼神世界の地域性と多様性を示す層として注目される。

あわせて、祭祀順序と祭禱の組み合わせを検討した結果、包山ト筮祭禱簡と整合する一般的な順序が確認できる一方で、祖先神が他の神祇に先立って祀られる例など、占問の性格や儀礼目的に応じて順序・組み合わせが柔軟に運用されていた可能性が示唆された。以上より、天星観ト筮祭禱簡は、楚における祭祀構造と鬼神観を具体的に把握するうえで重要な史料であり、本章で提示した分類枠組みは、包山・望山等との比較研究にとって有効な参照軸となる。他方、「その他」の神祇の性格や各神祇の地域性・歴史的背景には未解明の点が多く、今後の課題として残されている。

第四章では、楚国におけるト筮祭禱簡の比較を通じて、望山と包山の祭祀体系の共通点と相違点を検討した。包山ト筮祭禱簡は保存状態が良好で体例も整っていることから、従来は楚のト筮祭禱簡を論じる際の事実上の基準とみなされてきたが、望山ト筮祭禱簡の分析から、包山の体例のみでは楚国の祭祀文化の多様性を十分に捉えきれないことが明らかになった。

望山簡と包山簡の差異としては、まずト筮祭禱簡における「北方」「南方」の扱いを検討したうえで、斎戒の記録が望山簡には多く見られる一方、包山簡には見られない点に着目した。この違いは、斎戒が自明の前提として省略された可能性や、記録者の書写習慣の差異による可能性を含むものと考えられる。また、「大夫之私巫」の再解釈においては、祭品を伴わない「挙禱」の記載に注目し、従来とは異なる読み方の可能性を指摘した。さらに、「凶攻解」案をめぐっては、望山簡において祭禱対象と凶攻解対象が同時に記録される異例の例を取り上げ、包山簡との比較を通じて新たな理解の余地があることを示した。今後は、望山ト筮祭禱簡に見られるこれらの例外的事例が、他の楚簡資料にも確認されるかどうかを検証し、その意味を一層掘り下げる必要がある。

第五章の検討から、戦国期楚人の祖先観・祭祀体系について、いくつかの点を指摘しうる。第一に、「我先」は沮・漳などの地名列举と結びつき、個々の祖先名の比定にとどまらず、楚族の移住史・都城遷徙の記憶を伝える枠組として機能していた。第二に、「楚先」は老童・祝融・鬻熊を具体的に指す場合と総称的に用いられる場合が併存し、「三楚先」は固定的な合祀単位として把握されていた可能性が高い。「荊王」もまた特定王号ではなく、武王以前の歴代楚王の総称的祭祀対象として、清華簡『楚居』に見える起源伝承や丹陽-荊山期の政治地理と結びついていたと考えられる。ただし、穴熊と鬻熊の同一性など、なお検討を要する論点も残される。

葛陵簡にみえる「五世」は語としては確認されるものの、包山簡のように直系先祖を順次列举する「五世祭祖」の慣行は認められない。このことは、平夜君成にとって、直系五代の列举よりも、同世代・後代の楚王家傍系を祭祀することで王室との親縁性を強調する意図があったことを示唆する。また、「三世之殤」は年少者に限られず、無後・強死・移住による宗法的断絶など、社会的地位が未定の存在全般を含む広義の範疇として運用され、蒿祭など特定の儀礼と結びついていた。さらに、「上下内外鬼神」は祝号文における全称的招請表現として、祭祀すべき全ての鬼神を包括的に呼びかける特定の用法であったと考えられる。

以上より、葛陵簡における楚人の祖先崇拜は、先祖・先王を起点とし、直系・傍系親族を中核としつつ、最終的には「上下内外鬼神」に象徴される全ての神霊を包摂する体系として統合されていたことが明らかになった。新蔡葛陵簡は、地名・官職名・紀年記事に加え、「祭法」「祭品」に関す

る豊富な記述を備え、望山・包山・天星観と通じる一方で独自の特色を示す点において、楚人の宗教実践とその思想的背景の復原に資する重要な史料である。今後は他資料との対照と理論的検討を進めることで、こうした祖先観・祭祀体系の位置づけを一層精緻化していく必要がある。

第六章では、卜筮祭禱簡との比較を通じて、清華簡『金縢』における祭祀儀礼の諸問題を検討した。まず、「穆卜」は身代わりによる解決策を採用すべきか否かを問う占問であり、その実践内容は卜筮祭禱簡に見える「凶攻解」と対応する一方、「穆卜」が事前の占問、「凶攻解」が吉兆を得たのち専職の（攻）執事人によって行われる移崇儀礼という区別があることを示した。『金縢』では、本来は攻執事人が担うべき役割を周公自身が引き受け、災厄を自らに移して武王の回復を祈るという、通常の祭禱よりも一段と踏み込んだ行為が描かれており、その秘匿性は礼的規範からの逸脱性と政治的配慮の双方に由来する可能性が高いと論じた。

あわせて、包山二三一簡「凶攻祝婦佩緇・冠帶於南方」をめぐって、清華簡『金縢』の「爾之許我、我則晋璧与珪。爾不我許、我乃以璧与珪婦」の句と対照して読むことにより、従来難解とされてきた記述を、南方に特設した壇に佩飾を献じる儀礼として再解釈しうることを示した。両版本の『金縢』において献上対象が明示されない点も、卜筮祭禱簡の記載と照合することで、祭祀的意味をもつ南方壇の存在を前提とした表現である可能性が高いと考えられる。

以上の検討から、卜筮祭禱簡と『金縢』の共通性は偶然ではなく、先秦期の祭祀文化と宗教実践に共有された一つの潮流を反映するものであり、そこに祭祀観念の継承と展開を見て取ることができる。本章で行った伝世文献と出土資料の照合は、個々の文言解釈を精確にするのみならず、先秦期の祭祀理念・宗教実践の理解を深める有効な手がかりを提供するものである。一方で、「穆卜」と「凶攻解」との関係性について、なお未解明の点も少なくなく、今後さらなる検討の必要がある。

付録では、包山卜筮祭禱簡の釈文・訓読・日本語訳を一括して収録し、原文資料を随時参照し得るよう配慮する。

結論として、卜筮祭禱簡は楚人の鬼神観念と祖先祭祀制度を具体的かつ動的な形で映し出す一次史料であり、そこに記された卜筮・祭禱行為は、疾病・凶禍・政務・運命の不確実性に直面する個人が、鬼神との関係を調整し、自らの生を再編成しようとする試みであった、と言える。他方で、分析対象がいずれも貴族の墓葬に限られ、楚社会全体の宗教実践を代表するものではなく、また、一部鬼神の性格や宗教儀礼の本質については、なお不明な点が少なくないことも確認された。

今後は、新出資料の増加や他地域資料との比較、文字学的考察・考古学的情報・宗教学的理論を取り入れた学際的研究を通じて、卜筮祭禱簡に見える鬼神世界を、より広い東アジア古代宗教史の文脈の中に位置づける作業が必要である。本論文が示した諸仮説と問題提起が、楚簡研究および先秦思想史研究のさらなる進展に向けた一つの基礎作業となることを期待したい。